

⑤中央権力斗争の位置づけについて。福島同志より、
大衆の自然発生性の切り捨てと軍事力主義から、
斗争主体の力量抜きに権力獲得を目指すようなイメ
ージで中央権力斗争をとらえることは反対であり、
北海道は防衛斗争を自行隊の物理的解体とは位置
づけていないのであって、帝國主義の軍事外交路線
粉碎のための政治バクロの焦点として位置づけてい
る。と発言があり、問題の本質が國家説の暴力装置
機能説の理解にあるのではないかと指摘された。後
く関西地方委員会の坂部、高見沢両同志が又の発言
を行った。10・8以降から先進的大衆活動家の間で
ようやく権力斗争が萌芽的に意識される程に入っ
た。そのことは先に何と云ったか、(4)存在は二
の斗争形態のみでは、現状斗争のみの延長とはいけ
ないことと同時に(5)學校を戦術のエスカレーターその
まのとは何等問題の本質的前進にはならぬこと
である。大衆的実力斗争の自然発生の昇揚にのみ
依拠せず、この現段階の斗争を権力斗争へアプロ
チするものとして、階級関係からみるならば、権力
斗争が先進的大衆活動家の中に萌芽的に意識される
はめたとはいえ、中央権力斗争はまだ権力奪取斗
争を二〜三年に想定したのではない。

権力奪取を七〇年代に設定し、そこから至る過渡の
斗争形態、戦術として中央権力斗争を位置づけるべ
きである。10・2以降の権力と我々の階級関係は、
斗争そのものの弾圧から政治組織そのもの、また政
治組織を根を張る陣地そのものの战斗力を弱め破壊
してゆくことを狙ったものとしてある。この実は何
年の10・8斗争以降の局面とは異なる局面である。

この視点から、今後の政治斗争が、一つ一つ戦略
に位置づけられてゆかれるだろう。そして④現在の
政治の中心環を同盟に組織された強固な部隊で斗争
抜き、同盟も目的意識的に斗争で全人民的政治バク
ロを行ってゆくことも必要だ。この斗争単なるカン
パニアではなく、直接的な実力斗争として斗争を
ければならない。中央権力斗争とはこのような斗争
である。(4)この斗争は権力権柄に対する斗争を通じ
て中核権柄のための斗争となる。即ち大衆斗争とし
ておきていく日米基地斗争、自行隊パレードに対す
る斗争等に席巻をあたえてゆく(5)として最後に、中
央権力斗争は対防衛隊のみではなく、プロレタリア
人民に対する敵の攻撃の軍に対決して斗争、斗争を
プロレタリア階級形成の導として設定し、党形成へ
と高め促進する任がある。

以上を総合すると中央権力斗争の位置づけは次の
ように規定されるであろう。

一、中央権力斗争の現在の位置は、直接政府中核
権力権柄の恒常的占拠または解体ではなく、階級
斗争主体の波頭に位置する先進的活動家形に権
力斗争が萌芽的に意識されるはじめて現段階におけ
る全人民的政治バクロの環として位置する。
二、中央権力斗争の政治バクロとしての現代的意
味とは何か。ロシア革命における政治バクロの環
は、農民の広範な自然発生的反乱に目的意識的な
戦略的位置をあたえるボルシェビキの全口政治新
聞であった。現代における権力と社会の巨大なメ
カニズムを対象とするわれわれの政治バクロの環
は、一般的煽動および全口政治新聞のみでは不充
分であり、戦略的に理論武装された組織された部隊
を軸に先進的大衆を領導する権力権柄への斗争が
環となる。

三、中央権力斗争の実力斗争としての戦術的意味
は何か。現段階の政治バクロの環としての中央権
力斗争は、中核権力権柄に対する一般の抗議斗争
ではありえず、突入、攻撃等の戦術を駆使する実
力斗争でなければならぬ。なぜならば、現段階
の階級斗争の焦点として最も鋭く政治バクロを表
現するためには、中核権力の政治的权威を失墜さ
せ、政治的社会的焦点を形成する意味をもってい
るからである。

四、中央権力斗争を担う条件とは何か。中核権力
権柄への組織された部隊の進軍を可能とする条件
は、広範な大衆的実力斗争を支えられた社会的陣
地である。これとの関係を持ちとしては、一般的
に組織された実力斗争部隊を恒常的に再生産し、
部隊を堅持してゆくことはできない。

五、大衆的実力斗争を支えられた社会的陣地と中
央権力斗争の相互関連的發展段階において、七〇
年代を展望する権力奪取のための諸条件、即ち、
マップンストライキ、暴動、反乱、ソビエト、組
織された権力奪取を目指す武装部隊の諸準備が具
体的に保証されるものとなるだろう。

[B] 政治組織指導上の総括討論のまとめ

①従来、総括は路線総括にしばられてきたが、五
中季の総括は、政治組織指導上の総括、政治党派
にとつて理論とは何か、という組織総括が前面に
おしだされ、路線総括と同じ比重をもって提起さ
れていることが特徴的である。即ち一切の諸実践
の結果を政治路線に還元してしまつたらば、それ
一紙の情勢を見落していたという「見落し総括」
となり、またやや路線をつくりおけて突進すると

い結果になる。理論における無政府性を克服、指導における欠陥の根源克服の方法を確立することが政治指導上の総括の中心環に捉えられなければならない。以上が政治組織指導上の総括が五中奉総括の前面に政治路線總括と共に提起された意である。各級機関は以上の視点を総括の重要課題に捉えて討議を深めなければならない。

②(一)のような総括視点は①政治党派の論理を確立し、(二)諸条件(同盟の階級形成(大衆運動指導)と党形成(同盟建設)の具体的な系統的歴史過程を媒介として総括しなければならない。このように「階級を立てるならば、向点性を克服する基軸を「階級関係論」に捉えなければならない。七回大会以降、戦略の果敢方針化の過程で欠落していった「階級関係論」を方法論的に確立しなくてはならぬ。重要なことは戦略と運動論を統合する環として、「階級関係論」を導入し、「階級関係論」から威力を展望するところにある。われわれはマル派派との党派斗争(岩田)の体系を粉砕する過程で、階級關係論を危機論と共に経済主義の両翼として切り捨てた。威力論(国家説)を階級關係論のバランスの中に解消させるような岩田体系(国家威力論を支配論)や協体制論)および、革命主体(前行)が目的意識的に設定して切り開く階級斗争のダイナミズムを主軸として体系化しえない、ふん詰り帝因主義を基礎とする政治動態主義は完全に克服しなければならないが正しい階級關係論を確立しなければならない。

③(一)前行が目的意識的に設定し切り開く国家威力との階級先端の攻防は、階級斗争の総体ではなく、この先端の攻防は、階級の上皮をおおう自然発生的な大衆的実力との関係において、更に階級深部で分解する大衆意識との総体の関係において、相対的独自性に突出しうるのである。(二)これらの諸関係は、当然、同盟細胞(大衆的政治同盟(战斗の大衆活動家)→大衆行動組織)の立体的有機的組織指導パイプに於いて党形成→階級形成を確立される過程と照応するものである。(三)更に国家威力と前行が組織する先端の攻防を主軸とする階級関係は、諸階級諸階級の意識の意識の分解と斗争の前進に規制される諸党派關係に照応する。即ち統一戦線論として実践的に反映する。

④「階級關係論」は「威力斗争を基軸とした諸階級・諸階級の動向と統一戦線。われわれは、革命の第一の条件として主体的な党のための闘いの战斗力が突破する階級攻防を既成諸党派の動向が反映している階級總体の中に位置づけ、新左翼運動の日本階級斗争に占める現在の位置と同盟の位置を主体的組織力と

の関連においてとらえておく必要がある。

統一戦線問題が党派の政治課題となる段階は、その政治党派が階級社会の基本階級(プロレタリアート)に依拠して現実の社会勢力として登場しつつも、なおプロレタリア階級總体と諸階級を包摂しえないう段階において威力斗争に迫る組織戦術である。われわれの日本階級斗争における位置は、明らかに国家威力との攻防において先端を切り開く現在の位置を求め、斗争の質と社会的影響力において一大社会勢力としての地歩を築きつつある。われわれが同盟を占めて新左翼諸派の依拠する基盤は、その発生史(全常連Fとして出発)に制約を出て、いまは基本プロレタリアートを市民の階級から離れて、大量に組織するには至らず、そのうちとして公認、中小規模に拠点を築きつつある段階にある。したがって、われわれが直接的に同盟とする反帝統一戦線(統一戦線組織)の構想も、現実的には、新左翼諸派の諸派の統一戦線の枠内に限定され、諸階級諸階級の動向を直接的に反映しえない制約性を残している。したがって現段階においては、「階級關係論」を基礎に捉えて反帝統一戦線の組織戦術をもとらえなければならないのであって、「階級關係論」を威力論と統一戦線論に無條件に解消することはできないのである。

⑤国家威力とわれわれ新左翼との攻防を軸に反帝統一戦線を組織戦術の基本に捉えつつも、あくまでも、この攻防関係のみで一切階級斗争を切り捨てえない限界性を意識しておかなければならない。七〇年に至る攻防関係が熟する段階では階級斗争がわれわれ同盟および新左翼にも包摂しえないところのみならず、直撃を被せられない広範な部分からも登場し、階級斗争總体が深々広がり立ち上って展開するであろうし、10・21以降の局面はこのことを組織的に指し示している。就中、同盟のプロレタリア党への確立を指す五中奉は、プロレタリア本隊への同盟組織建設、拠点(↓拠点)と拠点(↑拠点)の貫徹において、「階級關係論」を、威力論・理論論・階級關係論・運動論・党組織論として一貫した体系として積み込まなければならない。この一貫した体系の実践的組織戦術として、階級斗争總体の立体的階級關係の組織戦術として統一戦術は確立しなければならない。

⑥「階級關係論」は七回大会以降の同盟に欠落していた、階級斗争の方法論的視点を確定したのである。この視点は更に理論的体系化と実体的階級分析を要請している。

安保粉砕日本帝国主義打倒をもちとする労働者党 建設をめぐりて全同盟の力を

五中委は「政府報告Ⅱ」の討議をひきまえて「政治報告Ⅱ」において提起されている課題、なかんずく「政治報告Ⅱ」の眼目である。

- ① 世界危機・世界革命の基本的展望
- ② 安保粉砕と日本労働運動、反戦青年季と中央権力、斗争・マッセンストライキ
- ③ 安保粉砕・日本帝国主義打倒をもちとする労働者党の建設

五中委は、全面遂行に着手することを決意した。それは、まず第一に、綱領委員会の設置と、全同盟を綱領獲得であり、第二に、中央における軍事委員会発定、書記局長化、統制委員会設置等々の獲得であり、第三に、この革命党建設への現在の任ムにおける決定的位置を占めるものであるが、われわれが確立した地区党を工場とロレタリアートの党としての内容をもちた地区党に高めていく斗いである。

中央委員会同志諸君によって鋭く指摘された通り、革命政略の革命的なものは、国家の暴力の破壊、権力奪取にまわって成される。

「労働粉砕を反動斗争の一大焦点として斗争せよ」として、ロレタリア世界革命への永続的展望を切り拓くこととせよ」という同盟は、同盟の力量を徹し、この一歩、すなわち、武装蜂起にむけて立ち上がったのではない。革命党とは「武装蜂起の党」であり、武装と蜂起を準備しえない党は、いかなる意味においても革命の党ではありえない。

だが、われわれがめざす党はレーニンの武装蜂起の党であって、決して、バーナーフやバクーニンの武装蜂起の党ではない。われわれが、安保粉砕・日帝打倒にあかまつきすすためだけに建設しなればならない党は、ルンパロの党でもなければ、無産階級、貧乏の党でもない。それは「ロレタリアートの党」であり、ロレタリアートの自己解放階級社会党、共産主義の党であり、「共産主義世界革命」の党である。

われわれは七回大会においてかゝる「ロレタリアートの武装蜂起の党」「共産主義世界革命の党」建設への五期計画を一歩をすすめた。

七回大会は、それへの具体的前進として、上からの中央集権的組織革命政略の原則を明らかにしつつ、強力な中央集権的組織と地区党、世界党建設にあけての国際野望をもちた。そして七回大会以降の八月、九月同盟は、東京、関西、名古屋において、七回大会が提起した党建設、就中、地区党建設について、その基本的作業を完了した。五中委は、このことの確證と共に、革命党建設にむけて、その現在の眼目として、次の諸点を決定し、八回大会を

中央委員会、この工場、ロレタリア党建設が今年12月、3月の四ヶ月間、すなわち、来春卒業予定の学生細胞同志諸君の戦線移行、及び学生細胞同志活動家の労働戦線へのオルタにこそ、決定的なポイントがあることを確認し、七〇年安保を日米労働運動の階級的戦いの成長を内裏とする第六次中央権力斗争、マッセンストライキとして推進し、このことをめざすわれわれにとって、この大戦会は、よく進められていること、69年第一四半期にこれをなすとげえず、70年において、この移行をなすことをめざしてみても、それは十分である。決定的な立地陣地であることと五中委は、確認し、この無産階級の課題として、八回大会の最大眼目の一つにするべきことを決定した。

五中委は、七回大会が提起した青年同盟建設について、青年同盟の性格と形態を鮮明し、「共産主義青年同盟」(仮称)を来年三月をもって総発せしめることを決定した。すなわち、(地区)工場細胞を基軸に、この周辺に広汎な戦線的青年労働者を募集してわが同盟の政治的影響力を定型化させ、それによって、階級斗争に利するヘゲモニーを一層強化戦斗化を一層保障していくことを、五中委は、決定したのである。

以上、五中委は、革命党建設における五中委の位置と任ムをこの四ヶ月間において確定し、中央工場細胞同志、工場、ロレタリア党建設と青年同盟建設をこまごまとしめくり、これに直ちにとりくむこととして、八回大会を切り拓くことを決意したのである。

さて、五中委が「政治報告Ⅱ」の討議、採択に

おいて、地区反戦と労組結合について、次のことを
深めを獲得した。

沖一、地区反戦は、青年労働者の結集をめぐすべ
き基本単位であり、取場反戦は地区反戦ではなく、
地区反戦こそ、機関加入が個人加入が、組員労働者
か未組員労働者かを問わず、現在における戦時的青
年労働者の基本結集単位であり、われわれは、この
意味において、労組結合の推進を、組合のルート
中での発展させることからは、さっぱりと袂別する。
組合機構の位階をのり、その地位をきつて斗争を
展望するものではなく、地区反戦への戦時的労働者
の結集、そのための組合内外的機軸、地位の活用を
え、われわれは展望する。だが、このことは、組合
と一切敵対し、およそ民間の「政治斗争」とは完全
自己区別することではない。民間が七〇年卒隊を目
前に、若干なりと、その重荷をおびながらして
るとき、我々は積極的「一歩を」として、い
ば「合法的」に政治斗争を全力をあげて行うことが
必要である。問題は①組合ルートの政治斗争はわれ
われにとっては何部分であること、しかも②組織
的にはそれを地区反戦強化→取場政治斗争の機軸
結合をのちとするための機軸としてつくること、こ
れである。

沖二、街頭斗争と取場斗争

街頭化といわれる場合、それには現在二つの内容
がある。

一は民青の街頭化であり、これはレクリエーシ
ョン、遊撃運動等としての街頭である。

二つには、われわれの街頭化であり、それは、権
力に対する闘い、街頭制圧と中央権力斗争としての
街頭化である。

この二者には質的な相異があり、われわれの街頭
化こそは、わがマルクス主義の革命戦略の威力打倒
斗争上、不可欠とされる斗争の形態であり、それは
市街戦→中央権力崩壊の萌芽としての現存のた
し。しかも政治権力との斗争としての街頭化において
政治意識の形成は、取場斗争・資本専制に対する斗
いに直接的に転化する相違的条件の形成としてあり
至前斗争において「緊急」としてあり、指導に媒
介されて直ちに転化結合する。それ故われわれは
へ取場斗争→街頭斗争への完全な一面性を改めて確
認する。

沖三、政治斗争における差別と地区

五中委が提起した八革命的政争とその形態

とはへ工場ソビエト→地区ソビエトと、それへ
の萌芽としてのへ取場反戦→地区反戦とあり、
従ってへ工場制圧→地区制圧こそ、同盟のライン
機軸であることとわれわれは確定した。だが、革
命的政治斗争はへ工場→地区へのマッセンストラ
イキにその最高の発展形態をつくりだしたから
こころ全員のマッセンストライキを結合し、
彼二州に青帯を与えるものとしての部隊→戦
17年ロシア全国労働者、68年自動車労働者
必要とし、且つ登場させる。それは日本において
は疑いもなく、公労協労働者である。かくして、
われわれにおける公労協労働者に対する政治指導
は、へ工場→地区へのそれのみならず、へ工場→
産別へのそれをも加えた二重の指導として貫徹さ
せなければならぬ。革命の基幹労働者は、その
重要な位置からして、二重の訓練をうけなければ
ならぬ、かくして五中委は、公労協産別委の新た
な性格を説く。

「政治報告II」は、およそ二州の諸問題にわ
たる討議をもつて深められ、採択されたが、「報
告II」はその不充分性として、口頭討議斗争の分
析の弱さが指摘され、それは口頭共産主義協議会
結成→五インター建設への展望とあり、
解明、方針化されるべきことが確認された。

五中委は、五中委が討議、採択した全内容が、
現在、全同盟化され、且つ、それを通じた五中委
の発展強化をめぐって、八回大会を獲得することと
決定し、このことが、「政治報告II」の討議をま
含めた五中委の火急の最優先事項であることと宣
言し、同盟内全同志に直ちに八回大会の再期取
功のための全活動に入ることを訴える(八回大会
の位置をめぐっては、別項参照)

沖田に、当面する階級斗争の一大転換と準備は必ず10、11月訪米を機とするであろう。これを中心に、六九年政治過程のはあくど全斗争の計画化、これが沖田の獲得である。

七大会以降の全階級実践とわ水同盟の斗争の総括の深さをかくつけとめ、B社会の現実の転換を先行するBの転回をB大会は実現せねばならない。

かゝる意味において、七大会が射星においたB大会は綱領大会としての位ちは与えられない。かつ、戦略斗争の深化が核心として提出してゐる日本革命の型と道すれを、主体をもちたいま一度深い実践的至験の媒介をもちて確定せざるべき段階にある。これへの接近は、明確に八大会で計画化され、九大会に継承せざるべきものである。九大会は、十月以降の決定的展開のため、必ず9月以前に、八大会実現を心まとして設定せざるべしことが確認された。

全同盟勇諸君

党的斗争を集中的に八大会成功として斗いとせよ！

II. 大会のための組織方針

1. 大会の意図と結束に關し全機関、細胞で固く意志一致せよ。

2. 予備討論が全細胞、機関で系統的に行なわれなければならぬ。

沖一段階、四中委決定

五中委選挙十補足まとめ

をもちて組織せよ (12/5)

沖二段階 大会選挙をもちて

(12/15) 9

討論の政治的組織的指導は、中央委員及び名級機関メンバーが行つ。

3. 大会代議員は必ずSで選出すること

4. 討論状況に關し、地区府県地方党機関は12/20に集約し、PBに報告せよ

5. 代議員、並に評議員氏名を必ず 日までに

へ通知

6. 大会実行委員長、佐伯、副、仏、事務局長、

松村をもちて有感する。